

10月24日 2学期期間集会 校長講話要旨

○日本史上初の女性宰相誕生

自由民主党の高市早苗総裁が、10月21日にようやく衆・参両議院の国会で首班指名を受け、日本の憲政史上最初の女性首相になりました。日本の政治史においては画期的なこととして、「ガラスの天井を破った」とされています。

しかし、世界的に見れば女性の政治指導者は、G7（主要7か国）のうち、イギリスでは40年以上前の1979年から1990年までの11年間マーガレット＝サッチャー首相でしたし、ドイツのアンゲラ＝メルケル首相は2005年から2021年まで16年間務めています。イタリアでは2022年から現在までジョルジョ＝メローニ首相です。

他にもスウェーデンのマグダレナ＝アンデション首相が2021年から1年、ニュージーランドでは、2017年から23年まで務めたジャシンダ＝アーダーン首相以前にも、既に2人の女性首相がいました。南米のペルーではディナ＝ボルアルテ大統領が2022年から今年10月まで大統領を務めています。

また、アジア諸国では、韓国では朴槿恵大統領が2013年から2017年まで4年間、台湾では蔡英文総統が2016年から2024年までの8年間政権を担当しています。フィリピンではグロリア＝アロヨ大統領が2001年から2010年まで、ミャンマーではアウン＝サン＝スー＝チーが2016年から2021年まで国家顧問、実質的な大統領として政権を担当しました。タイではペートンタン＝シナワット首相が2024年から今年の8月末まで務めていました。ですから、ようやく日本も世界の流れに乗ったということになるでしょう。日本においても、女性が政治を担当することが珍しくないこと、一層当たり前のことになっていくことでしょう。

○読書週間

来週月曜日10月27日から11月9日まで第79回読書週間になります。

今年の標語は「こころとあたまの、深呼吸。」です。

私は何回か、読書についてこういった集会や、入学式等でもお話してきました。「万巻の書を読み万里の道を行く」。多くの本を読み、そして長い旅に出て、多くの経験を積んで、書物から得た知識を、長い旅を通じた経験して、人は成長していくことの重要性をお話しています。

8月の末の新聞の投書欄にこんな高校生の投書がありました。

読書の勧め 筆者と「対話」しよう 高校生 （千葉県 15歳）

皆さんは読書をする時間を作っているだろうか。若者を中心に読書離れが広がっているという。SNSや動画配信サービスなどが手軽に楽しめるようになり、本を手にする機会が減っているのだろう。

私の通った小中学校には、登校後20分間の「朝読書の時間」があり、多くの本を読めた。高校に入ってこの時間がなくなり、読書をしなくなった。テレビでこう言っている人がいた。「読書は対話だ。多くの人（著者）と対話することで感情や言葉を養うことができる」

私の周囲には「えぐい」「やばい」などの若者言葉といわれるあいまいな言葉であふれている。これらが生まれる理由は読書という「対話」をしていないからではないか。私は最近、夜寝る前の少しの間だけでも読書に費やすことにしている。読書をしていない人は、スマホに没頭しすぎず、隙間時間にぜひ多くの人と「対話」をしてみしてほしい。

とありました。読書を通じて得られるものはたくさんあります。その本に書かれていることを著者との対話の中で知識や知見を身に付けていくだけでなく、多くの本を読んでいく中で自然と身につけていくのが読解力です。読解力はすべての学力の基礎、基本になります。そういった意味でも本を読みましょ。しかし本を読むだけではダメで、万里の道を進むことで経験を積み、生きる力を身に付けることになります。

ところで、「読解力」と訳されることの多い「リーディング・リテラシー」について考えてみましょう。2002年のOECDの定義では、「目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社

会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」とされています。

文章を読み取るだけでなく、それをもとに自分の意見を述べ、社会参加の行動に結びつけることを指していると考えられます。主体的にものと考え表現し行動できるかが問われています。読書をする、受け身ではなく、そこから得たものをどのように発信していくかが問われているということです。

情報を手に入れて、自分の頭で理解し、そして自分の意見をもつことがこれから求められる力とされています。そのためにまずは本を読むことから始めましょう。

○東京2025デフリンピックが開催されます

来月11月15日～26日の12日間に東京を中心に、70～80の国と地域、約3,000人の選手が参加する予定です。

一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会のホームページなどによると、デフリンピックとは、デフ+オリンピックのことを言います。デフ(Deaf)とは、英語で「耳が聞こえない」という意味です。デフリンピックは国際的な「聞こえない・聞こえにくい人のためのオリンピック」です。オリンピックと同じように4年に1度、夏季大会と冬季大会がそれぞれ開かれます。ルールはオリンピックとほぼ同じです。

デフリンピックとパラリンピックの最も大きな違いは、参加できる障害の種類です。デフリンピックは聴覚障害のある選手のみが対象となるのに対し、パラリンピックは身体障害など、聴覚障害以外の障害のある選手が参加できます。そのため、デフリンピックでは聴覚に頼らない競技環境が整えられ、パラリンピックでは聴覚障害者のための競技種目が設定されていません。

デフリンピックには、①「補聴器」などを外した状態で、きこえる一番小さな音が55dbを超えており、②各国の「ろう者スポーツ協会」に登録されている選手で、記録・出場条件を満たしている人が参加できます。この55dbとは普通の声での会話が聞こえない音量だそうです。

初めて開かれたのは、1924年のフランスの夏の大会でした。その時、9カ国、148人の選手が出場しました。2017年に第23回目の夏の大会がトルコのサムスンで行われ、史上最多の100の国・地域、約3100人の選手が出場しました。東京2025デフリンピックは、100周年の記念すべき大会であり、日本では初めての開催になります。

競技種目はオリンピックとほぼ同じ、陸上、バドミントン、バスケットボール、ビーチバレーボール、ボウリング、自転車、サッカー、ゴルフ、ハンドボール、柔道、空手、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、バレーボール、レスリングで21競技を行います。

東京都内16か所の会場の他、伊豆大島裏砂漠でオリエンテーリング、伊豆修善寺の日本サイクルスポーツセンターで自転車競技、福島Ｊビレッジでサッカーを実施予定です。

競技をするうえで、耳の聞こえない人のために様々な工夫が必要になります。国際手話のほか、スタートランプや旗などを使った視覚による情報の保障が特徴です。

耳が聞こえない人は、見た目からは聞こえないことがわかりません。しかし、スポーツをするうえで、聞こえる人に比べて不利なことが2点あります。

1つはバランスがとりにくいこと。耳には「体のバランスを取る」という大切な役目があります。2つめは、情報の量が少なくなること。聞こえる人はチームメイトに「パスするよ」「こっちにパスをちょうだい」など、声でコミュニケーションを取って、次の動きをとります。ところが、聞こえないとチームメイトと常に目で合図するほか、手話によるコミュニケーションが必要になります。聞こえる人同士のプレーとは、別の作戦が必要になります。

デフリンピックが行われることで、聞こえる人と聞こえない人との間にある「目に見えない壁」を取りのぞくきっかけになります。パラリンピックも含めて、障害のある人とそうでない人にとって、私たちの住む日本が今よりもっと暮らしやすい社会になっていくのではないかと考えます。

私の話は以上です。